

# 平成19年度大学院教育改革支援プログラム

## 「日本文化研究の国際的伝達スキルの育成」事業の概要

平成19年度実施統括責任者  
大学院人間文化創成科学研究科・比較社会文化学専攻長  
近 藤 譲

平成19年度の大学院教育改革支援プログラムに採択された「日本文化研究の国際的伝達スキルの育成」は、お茶の水女子大学の比較社会文化学専攻（博士後期課程及び前期課程）の教育プロジェクトです。今日の国際社会では、男女が差別なしに共に社会・文化に貢献することが当然となりつつあり、国内外の大学や研究機関だけでなく、文化機関や、国際政治機関等にも、ますます高い能力をもった女性の進出が待ち望まれています。この教育プロジェクトは、そうした国際社会の要請に応える人材の育成を目指して、特に、人文系の大学院生の国際的コミュニケーション能力を練磨すると共に、本学に確立されている国際日本学の研究基盤の上に立って、日本文化研究の発信の担い手として、国際レベルでの社会・文化貢献を為すために必要な能力、知識、思考力の涵養を目的としています。

この教育プロジェクトのプログラムは、3つの柱から成っています。即ち、①海外の大学で授業実習を行う「海外インターンシップ」や、海外の研究者と専門的な討論実習を行う「アカデミック・ディスカッション」、そして、国際共同ゼミ、国際日本学シンポジウムを始めとする「国際的な現場での教育」。②本学に蓄積されている日本文化研究関係の知的資源を活用して、「日本学研究コーパス」を作成し、電子メディアを利用して広く海外に発信する実習によって、国際的情報伝達のノウハウを学ぶ「情報伝達スキルの練磨」。③学生が、自分の特定の研究専門領域だけでなく、学際的・総合的な視点から、日本的思惟方法と文化を広く、深く理解できるようにするための副専攻「日本文化論」科目群の設置です。

これらのプログラムによって、学生は、本学大学院の日本文化研究の最高水準の研究環境の中で学びながら、同時に、海外の大学に留学して得られるのと同程度に高度な国際性を獲得することが可能になります。つまり、本学大学院で学ぶことで、極めて高度な専門研究と国際性とを同時に身に付けることが期待できるのです。

本教育プロジェクトの初年度に当たる今年度は、上記②及び③のプログラムについては、次年度からの本格的な実施に向けて十全な準備を整えました。「情報伝達スキルの練磨」に関しては、実習に用いる史料の選定を行いつつ、コーパス作成のノウハウについての教育を実施しました。この実習の成果は、来年度以降、「日本学研究コーパス」として具体的な形をとって顕れてくるでしょう。又、副専攻「日本文化論」科目群としては、来年度から20科目が新たに開設される準備が整いました。

本年度の実施プログラムの中で、その教育成果が最も具体的な形で表れているのは、上記①の「国際的な現場での教育」に関わるものです。初年度の事業実施期間が実質的に後期からの半年であったにも拘わらず（勿論、そのために、「海外インターンシップ」や「アカデミック・ディスカッション」のように、次年度からの本格的な実施に向けて準備を整える段階のプログラムもありましたが）、「国際的な現場での教育」では、既に、目覚ましい教育成果を見ることができました。本報告書では、それらの成果を、「海外研修事業編」と「シンポジウム、コンソーシアム編」の2巻に分けて、報告いたします。

本巻「海外研修事業編」は、学生海外調査研究と、国際共同ゼミの報告から成っています。学生海外調査研究は、学生が自ら作成した調査計画に基づいて海外において調査研究を行なうもので、博士学位論文作成を、直接的・実質的に支援するプログラムです。今年度は、募集人数を越える数の学生が応募し、選ばれた学生は、充実した調査研究を行ないました。その成果を、指導教員のコメントと共に掲載しています。

海外提携大学等との連携による国際共同ゼミは、計4回実施しました：「日中韓3ヶ国合同ジョイントゼミ」（19年10月、於：北京日本学研究中心）、「台湾大学とのジョイントゼミ（TVシステムによる遠隔ゼミ）」（20年1月、於：お茶の水女子大学）、「フランス共同ゼミ」（20年1月、於：パリ・ディドロ〔第7〕大学、フランス国立高等院、他）、「台湾大学との共同ゼミ」（20年2月、於：台湾大学）。学生は、これらの国際的な場で発表を行なうことによ

て、海外の教員から指導を受け、外国の研究者や学生と討論をする機会を得ることで、国際的な水準の批判意識をもって自らの研究を進めることができるようになります。その教育効果は、国際的に高い水準にある博士学位論文の執筆に大きく寄与するに違いありません。